

第 30 回認知リハビリテーション研究会 プログラム

2020 年 10 月 24 日 (土) 慶應義塾大学病院 11 階

開会の辞 14:00

慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 三村 將

一般演題：認知リハビリテーション I 14:05~15:05

座長：つつじメンタルホスピタル 田淵 肇

1 高次脳機能障害を持つ患者への Internet of Things (IoT) の活用が有効かどうか

足利赤十字病院リハビリテーション科 ○中島明日佳 中村智之 稲葉貴恵
同 神経精神科 船山道隆

Internet of things (IoT) はインターネットに接続させて通信させることで「自動認識、自動制御、遠隔操作」などを可能にする。IoT は健常者だけでなく、高次脳機能障害を持つ患者の日常の手助けにもなる。とくに、その場その瞬間のサポート (ongoing support) を必要とする記憶障害や注意/遂行機能障害に対する支えになる可能性がある。今回われわれは、IoT を用いたリハビリテーションについて症例呈示とともに海外の報告を交えて現状を紹介する。

2 脳外傷後遺症に外来グループ訓練による障害学習が有効であると思われた一例

神奈川リハビリテーション病院リハビリテーション科 ○青木重陽 福井遼太
同 心理科 殿村 暁
同 医療福祉総合相談室 永井喜子

40 歳代、男性。交通事故で受傷。受傷時 GCS は E3V3M5。びまん性軸索損傷の診断で保存的に加療された。受傷 2~5 ヶ月当院入院。処理速度低下や注意障害を認め、病識は低下し、家族は性格の変化を指摘した。受傷 10 ヶ月から障害学習が目的の外来グループ訓練に参加。その後、職場内訓練を行い、復職した。外来グループ訓練とその後の個別訓練が有効であったと考えられた。障害学習の方法について考察する。

3 脳炎の後遺症とリハビリテーション

足利赤十字病院神経精神科 ○船山道隆
江戸川病院リハビリテーション科 中川良尚

自己免疫性脳炎やウイルス性脳炎による後遺症は症候性てんかん、記憶障害、意欲の低下、注意障害などが挙げられる。今回われわれは、足利赤十字病院神経精神科と江戸川病院リハビリテーション科に通院した脳炎後の患者 36 名を対象として、診断に至るまでの日数の違いや疾患別や年齢別による後遺症の重症度の違いを明らかにし、適切なりハビリテーションの方法を検討する。

一般演題：認知リハビリテーションⅡ 15：05～15：45

座長：東京都リハビリテーション病院 藤永直美

4 FTLDの2症例に対する検討—拡散テンソルトラクトグラフィーを用いて臨床を考える—

慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 ○穴水幸子 斎藤文恵 仁井田りち
三村 悠 田渕 肇 三村 將

前頭側頭葉変性症（FTLD）の多様な症状・病態とその基盤にある脳内変化の理解のために拡散テンソルトラクトグラフィー-DTTの有用性が示唆されている。DTTはMRIにおける拡散テンソルを元に走行している脳内神経線維を追跡画像化する方法であり、大脳白質の微細構造の異常、神経線維の整合性を評価しうる。今回、FTLD 2症例に対しDTTの脳画像と並行し神経心理検査と失語検査を施行し、経過を分析しながら治療と介入を検討したので報告する。

5 機能低下を呈したブローカ領域失語例へのアプローチ - 適切な言語刺激の必要性 -

江戸川病院リハビリテーション科 ○近藤郁江 中川良尚 笹嶋侑子 岩佐香菜美
原 未来 木下結理 佐野洋子
足利赤十字病院神経精神科 船山道隆
江戸川病院神経内科 山谷洋子 加藤正弘

脳梗塞発症時50代男性。中等度ブローカ領域失語を呈し、発症後2年時に軽度まで改善して訓練終了。訓練途中から復職。終了から4年10ヵ月後に脳画像上は再発がないにもかかわらず失語症および知的機能の著明な低下を訴え訓練再開。10ヵ月間の集中的な言語訓練実施後、再び機能回復を認めた。本症例においては、社会生活の中で受ける言語刺激のみでは機能維持を図れなかったと考えられ、より適切な言語刺激の検討が必要であった。

～ 休憩 15分 ～

特別講演 16：00～17：00

司会：慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 三村 將

失語症患者による刑事事件の裁判 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 村松太郎

障害を正確に理解し、最大限に有効な支援方法を見出し実行する。失語症患者が起こした刑事事件について司法関係者から我々が受けたこの依頼は、認知リハビリテーションそのものであったが、ゴールが刑罰の確定であるという点だけが異なっていた。

閉会の辞 17：00

飯能靖和病院リハビリテーションセンター 本田哲三